

地域社会も巻き込んで学ぶ「魚の採り方」 —ブラジル小中学生への教育支援ボランティア活動



活動を支えるボランティアの皆さん

古河電気工業(株) マーケティング推進本部
営業企画部 グローバル戦略ユニット

アシスタントセールスエンジニア **ギレルメ ホフマン**

Guilherme M. Hoffmann

当社のブラジル法人である FURUKAWA INDUSTRIAL S.A. Produtos Eletricos 社 (FISA) は、ブラジル南部パラナ州の州都クリチバにある。そこは近隣を加えると約 300 万人が住む都会で、気温も比較的穏やかで、欧州や日本からの移民も多く住みやすい街である。2004 年ごろから FISA の規模も拡大し、現在では工場はクリチバに 2 つあり約 900 人が働いている。他にも、サンパウロに 1 つ、アルゼンチンに 1 つあり、南米に 4 つの工場を持つ規模になっている。

FISA の周辺には、生活環境が未整備で貧しい地域がある。われわれは 10 年以上前から近隣の学校に食料品や文房具を支給する活動をしていた。ブラジルには、人を救うには「魚をあげるのではなく、魚の採り方を教えるべき」という古い格言がある。活動開始後しばらくして、FISA では貧しい人々に自立・自活を促すには「教育」こそが最良の方法という結論に至った。教育によって世の中をよりよく理解し、仕事を持つことで生活状況を改善し、より清潔な環境で生活できるようになる。また、「もったいない」の精神も理解できるようになると考えた。

これがわれわれの社会貢献の基本精神となり、それを実行に移すべく 2004 年に現在のプログラムがスタートした。

補習授業、職業訓練からスポーツまで

まず、近隣の村の中から特に貧しい 2 つの地区を選び、そこにある小学校に生徒を推薦してもらい、FISA の敷地の中で教育を行なうことで

スタートした。クラスは 2 つの段階に分かれており、第 1 段階は 10 歳以下の小学生が対象で、そこでは基本的な学習能力の習得を目的とした授業が毎日実施されている。第 2 段階は第 1 段階を卒業した 11 歳から 14 歳が対象で、隔週の土曜日に実施される。こちらは実用的な職業訓練に近いもので、①価値観、倫理、人生哲学などを含む授業、②手工芸技能習得を含む就業環境への適応訓練に加えて、③スポーツ、ダンス、コーラスなどで構成されている。当然だが、勉強ばかりでは生徒のやる気が維持できないので、文化的な活動やスポーツなどでバランスを取る必要があるのだ。また、必要に応じて工場の産業医による歯科を含む医療も提供されるようになっている。

第 2 段階を終了した生徒は、ジュニア・インターン（トレーニー）として企業に採用してもらえ可能性がでてくる。その場合は、生活支援のため賃金が支払われ、トレーニーは収入だけでなく仕事の経験を得ることもできる。さらに重要なのは、意味もなく街をぶらつく時間がなくなるので、不良仲間に取り込まれるリスクも低減されるというメリットもあることだ。

その後、16 歳になれば、通常なら可能性がほ



FISA 敷地内で授業を受ける生徒たち

とんどなかった工業高校進学への門戸が開かれ、将来、本格的に就職するための専門技術を身に付けることができるというものだ。いくつかの工業高校には、インターンシップ受け入れ企業を紹介してもらい、企業には卒業後に生徒を採用してもらうようお願いしている。

過去このプログラムでは、第1段階で200人、第2段階では150人の生徒を受け入れてきた。さらに、第3段階としては生徒の就職の世話もするが、これまでFISAでの採用も含め46人に仕事を紹介することができた。

社員家族、地域社会も取引先も巻き込んで

このプログラムで教える先生は、FISA社員に加え社員家族もボランティアで参加できるのが特徴だ。また、このプロジェクトには専任の社員担当者がおり、ボランティアの時間管理などプログラム全体の運営管理を行っている。サッカーについては社員だけでなく、近くのスポーツ協会からのボランティアが来て本格的に教えてくれ、生徒の間では人気の科目になっている。さらに、この活動に共感するFISAの取引先企業の協力も得ている。例えば、輸送業者にはスクールバスを提供してもらい、レストラン業者には工場内で生徒に食べ物を無償で提供してもらう活動もある。

このプログラムはFISA経営陣の積極的なサポートも受けており、社員ボランティアは、就業時間内に仕事を離れて生徒に教えることができる。現在では、生徒のために工場敷地内に特別の教室を作り、専用のコンピュータも設置されている。最近では受け入れる生徒数が増えており、ボランティアの数も増やすことを検討している。



環境意識向上のための屋外授業



当然大人気の体育（サッカー）の授業

ボランティア参加者自身も成長

私自身もFISA社員として2009年に同ボランティア活動に参加し、ポルトガル語を教えた。このクラスは第2段階のもので21名の生徒が参加し、数学と国語（ポルトガル語）を、毎週土曜日の午後に各90分、合計3時間教えるものだった。当初は学校の授業についていけない生徒ばかりで、教えるのに大変苦労した。ボランティアは教師としては素人であり、どのように教えるかを皆で議論したり、経験豊富な先輩ボランティアの話を聞いたりして教え方を学んだ。また、経験者と初心者をペアにして、先輩から学びながら教える方法も採用した。

そうしてボランティアも生徒たちも頑張った結果、多くの生徒の学力はめざましく向上した。また、ある生徒を難関の工業高校に合格させることもでき、皆の努力が報われ大変嬉しかった。

ただ、悲しい現実としては、途中でドロップアウトする生徒が出てくることだ。第1段階を卒業した生徒には、そのまま第2段階に進んでもらいたいのだが、彼らの住む地域では生活環境が厳しく、一度ドロップアウトすると学校への復帰は難しい。われわれの目標は、全ての若者がそれぞれの仕事に就けるようになってもらうことだ。

この経験を通じてボランティア自身も、生徒の集中力をどのようにして維持させるかなど多くのことを学び、私自身にとっても大変貴重な経験となった。地域社会のためにも社員のためにも、この活動が続くことを願っている。

◆古河電気工業のCSR活動

<http://www.furukawa.co.jp/csr/index.htm>